



わたしの聖戦

女性が働くということ

148

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

自閉症という個性

心理学の授業で、発達障がいやパーソナリティ障がいについて教えている。

その中で、自閉症を取り上げた。最近クローズアップされる学習障がいやアスペルガーとともに、発達障がいの代表格として知られている。昔からあったとされるが、はじめて公に報告されたのは1943年のことである。誤解されやすいのだが、自閉症はいわゆる「心の病気」ではない。また、ストレスや幼児期の虐待などが原因となるものでもない。自閉症は、あくまで先天的な脳の中枢神経系の障がいによるものである。

その定義は非常に難しく、重度の知的障がいを有している場合もあれば、知的な障がいのない人、むしろIQが通常より高い人など実にさまざま。きっちりとした区切りがなく虹のように連携していることから、「自閉症スペクトラム」といわれている。発語がうまくできない場合はコミュニケーションに支障が生じるため、周囲にとっては何を考えているのかわからず、その行動も理解し難い。あれこれ推測はするものの、実のところは掴みどころのない「個性」である。

そんなときに、NHKのドキュメンタリー「君

が僕の息子について教えてくれたこと」を観た。3歳のときに自閉症と診断された東田直樹さんが、2007年に書いた「自閉症の僕が飛びはねる理由」がイギリスの作家によって翻訳され、世界中でベストセラーになっているという内容だ。その



不可解なこと、たとえばピョンピョン飛びはねる行動や同じことを何度も聞き返すことの理由をわかりやすい文章で解きほぐしている。番組を観たり本を読んだ人は、東田さんを通じてはじめて自閉症の人の内面に触れることになり、誰もが驚きとともにこれまで

の思い込みの間違いに気づき、同時に打ちのめされる思いがすることだろう。教科書や一部の情報だけでわかったつもりになっていた自分を、心底恥じることになる。

作家も自閉症の息子を抱えていて、東田さんの本を読み、はじめて息子の行動が理解でき、その感動から翻訳を手がけたという。東田さんは、話すことは困難ながら、極めて高い知性と感性を持っており、周囲の人にとっては

子どもが望んでいるのは親の笑顔」だといひ、「僕のせいで家族が犠牲になっっていないということ。こども時代の僕に教えてくれた家族はすごい」と綴る。うまくコミュニケーションが取れず、行動のコントロールができない自分に戸惑い、目の前

の相手を気遣っているところがよくわかる。見た目の行動とはまったく裏腹の東田さんの豊かな感情に接し、頭を後ろから叩かれたようなショックと熱い思いでいっぱいになる。

東田さんに寄り添う母親の静かなたたずまいも印象的だ。早い時期から障がいに気づきつつ彼の感性を大切に守り伸ばし続けてきた家族の姿もまた、深い感動を呼ぶ。

東田さんは自分の著書を持つ親のバイブルとなっていることを「人が喜んでくれるのが嬉しい」と素直に表現している。

いったい、障がい、とは何だろうと思わされる。自分は何を知っていて何ができていたのだろうか振り返ってもみる。

その課題は永遠であり、かつ普遍的であることを改めて思う。人は、生きていくこと自体がすごいのだ!

イラスト・伊藤栄章